MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．４．１２　発行元
第 466 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

かつての名作・傑作　その6

４５６号に続いて１９７０年代～１９８０年代にかけての作品の中で、私が数冊しか読んでいない作家の傑作、名作と思われる作品を紹介していく。今回はその時期の中では比較的新しい作品を取り上げた。

少ない読書の中から

１９８０年代後半、私は本が読めない時期に近づいていた。仕事が忙しかったためだが、一年に１００冊こなせない状態が続いた。計画的に本を買うことが出来なくなっていたので、気まぐれな選書しかできなかった。そんな中で、今手元に残っている本を三冊選んでみた。

この時期の後、私の完全な読書中断期間になるわけで、読書に関しては欠落の時代。大沢在昌の『新宿鮫』も宮部みゆきの『火車』も高村薫の『マークスの山』もずっと後になってから読んだ。この時の積み残しは大きい。でもまぁ、思い通りに行かないことが長い間には必ずある。読書だけがすべてではないのだから当たり前のこと。

筒井康隆『ロートレック荘事件』

１９９０年新潮社。『小説新潮』に連載された後単行本になった。御存知のように筒井康隆はミステリを専門とはしていない作家。その作家がミステリを書いたので話題を集めた本。この年の『このミステリーがすごい！』年間ランキングでは第１１位に入った。仕掛けがあるので、賛否両論が…。表紙にも中の挿絵にもロートレックの絵が使われている。

冒頭に来るのは八歳の頃の出来事。滑り台で前を滑っていた子に後の子がぶつかり、前の子が落下して下半身が動かなくなる大怪我を負った経過が述べられる。（フランスの画家ロートレックが下半身不随になったのは十四歳の時）　そしてその２０年後。ロートレック荘と呼ばれる別荘に工藤と浜口がやってくる。工藤は大学の助教授で、浜口は画家として有名になっている。迎えるのは木内氏令嬢を含めた三人の若い女性たち。この別荘は元々は浜口家の所有だったのだが、事業の失敗で木内氏に譲られたものである。木内氏はロートレックのコレクションが自慢で邸内のいろんな箇所に作品を掲示している。集まるべき全員が揃って楽しく過ごそうとしている時、二発の銃声が響き、女性のひとりが倒れる。警察が呼ばれ捜査が始まるのだが、更に悲劇は続き…。

大西赤人『引き継がれた殺人』

１９８７年光文社文庫。大西赤人は十六歳の時に『善人は若死する』を書いてデビューした作家で、ミステリ系列の作品が中心になる。作品数がそれほど多いわけではない。私の手元にあるのは本書と『鎖された夏』の２冊だけ。

本書は著名な推理作家の松原龍彦が仕事場としているマンションの一室で死亡しているところを発見される場面から始まる。青銅製の馬の置物で殴られたもののようである。やがて松原のアシスタントをしていた小野寺和美が登場し、彼女の指紋が置物に残っていたものと一致することなる。

この後、松原の机上に残されていた『雪のじゅうたん』という未完の短編作品が雑誌『小説世界』新年号に掲載されることになる。題名のとおり、周りを雪で覆われた建物の中で起きる殺人事件がテーマ。「解決編」は書かれていない。名探偵・薬師寺太郎シリーズの一編なので、「本格謎解き」として書かれたものらしいと推測される。現場の「見取り図」もついている。ということで、「劇中劇」としての謎も解かなければならないし、松原を殺した真犯人も確定しなければならない展開になっている。

長井彬『殺人路・上高地』

１９８６年カッパノベルス。長井彬と言えば１９８１年に江戸川乱歩賞を受賞した『原子炉の蟹』を取り上げるべきなのだろうが、私の本棚に残っているのは本書だけである。この時期、『北アルプス殺人組曲』など山岳ミステリの流れで作品が作られている。

長野県警の小出刑事が非番の日に河童橋の対岸にある女性の姿を見る場面からスタートしている。栗色の髪、サングラス、赤いブラウスに金色のネックレス…。一人旅らしい。その日の朝、松本駅からのバスで一緒になり、途中の大正池のところで姿が見えなくなっていた人物である。小出は後を追いかけるがレストランで再び見失ってしまう。二日後、彼女は遺体となった発見され、捜査が始まる。その中で、彼女は河童橋付近にいたと同時刻に数キロ離れた明神池でも姿を見られていることがわかってくる。東京のエアロビクスのインストラクターをしている河本真紀子だという。やがて、夫の邦明、愛人の西浩司、女友達の井関久美、並木裕子と容疑者らしき人物が浮かび上がるのだが、いずれもアリバイがあることがわかってくる。続いて第二の殺人が…。今度は徳沢と東京・池袋間でのアリバイ問題である。刑事はこの壁を乗り越えることができるのか。